

Red Hat Enterprise Linux サブスクリプションガイド

2024年3月13日

目次

はじめに	2
サブスクリプションの購入で得られるもの	2
プロダクション環境向けのサポート	4
用語集	8
サブスクリプション・パッケージ・モデル	8
サブスクリプション注文の構成方法	9
サンプルワークシート 1: 物理レイヤーのプロビジョニング	10
サンプルワークシート 2: 仮想環境へのゲストの追加	10
サンプルワークシート 3: 仮想環境のセットアップ	11
サブスクリプションのシナリオと推奨	11
物理プロダクション環境	11
サンプルワークシート 4: クリティカルな物理プロダクション環境のセットアップ	12
仮想プロダクション環境	12
サンプルワークシート 5: ゲスト向けサブスクリプションの算定	13
サンプルワークシート 6: 仮想化環境での Red Hat Enterprise Linux 向けサブスクリプションの算定	14
オープン・ハイブリッドクラウド	14
サンプルワークシート 7: プライベートクラウド環境向けサブスクリプションの算定	15
サンプルワークシート 8: パブリッククラウド環境向けサブスクリプションの算定	16
ハイパフォーマンス・コンピューティング (HPC)	16
障害復旧	16
開発環境	17
Red Hat Enterprise Linux for Workstations	17



サブスクリプションの管理	18
サブスクリプションの更新	19
サブスクリプションの利用条件	19
システムの対応範囲	19
サポートサービスレベル	20
サブスクリプションとサービスの適切な使用	20
次のステップ	21
Red Hat カスタマーポータルへの登録	21
サブスクリプションの有効化	21
サブスクリプションの関連付け	21
ソフトウェアのダウンロード	21
Red Hat Enterprise Linux 製品	22

はじめに

Red Hat® Enterprise Linux® は、あらゆるハイブリッド・デプロイメントに一貫した基盤を提供し、そこから得られる制御、信頼性、自由度でお客様の組織の運営を担うアプリケーションを強化します。Red Hat はフォーチュン 500 の企業の 90% 以上にパートナーとして信頼されており、Red Hat Enterprise Linux サブスクリプションを利用すると、オープンソース・コミュニティに直接アクセスしてサポートを受けられるほか、数千ものクラウド、ソフトウェア、ハードウェア・プロバイダーからなるエコシステムも利用できます。

Red Hat Enterprise Linux サブスクリプションガイドは、使用している Red Hat Enterprise Linux のバージョンにかかわらず、お客様の技術的およびビジネス上の要件に最適なサブスクリプションを選ぶ際の重要な指針となります。サブスクリプションの利用条件の概要や、サブスクリプションの管理および更新に関する情報も記載されています。

このガイドは購入責任者や調達部門の担当者向けであり、アーキテクチャそのものよりも、アーキテクチャに合わせたサブスクリプションを選ぶための詳細事項を中心としています。一般的な開発および実稼働環境へのデプロイに対応する、シナリオベースのワークシートを用意しています。Red Hat カスタマーエクスペリエンス&エンゲージメント (CEE) をはじめとして、[カスタマーポータル](#)やサポートサービスに対するサービスレベル契約 (SLA) など、お客様やユーザーが Red Hat サブスクリプションを活用するさまざまな方法を紹介しています。

サブスクリプションの購入で得られるもの

Red Hat Enterprise Linux サブスクリプションへの投資には、お客様のビジネスにとってメリットとなる付加価値があります。

製品およびサービス：

1. エンタープライズ・ソフトウェア：サブスクリプションによって、オープンソースソフトウェアの制御されたサプライチェーンを通じて構築される最新の Linux イノベーションを利用できます (パッチの継続的デリバリーや追加費用がかからないアップグレードなど)。サブスクリプションは、Red Hat Enterprise Linux に対するものであり、特定のバージョンに対するものではありません。Red Hat Enterprise Linux の新しいバージョンがリリースされた場合、追加のライセンスなしですぐにそのソフトウェアを使用することがで

きます。これにより、時間やコストのかかる販売サイクルを経ることなく、組織にとって都合のよいスケジュールでアップグレードできます。さらに、複数のパブリッククラウド環境で Red Hat Enterprise Linux を利用できます。Red Hat Enterprise Linux を導入することで、Red Hat ポートフォリオ全体と連携するように開発および認定されたプラットフォームを利用できます。

2. **先進のオープンソース・テクノロジー**：信頼されるアドバイザーであり、オープンソース・コミュニティへの主要なコントリビューターである Red Hat は、先進テクノロジーと、それらを信頼性の高いセキュリティ重視のソリューションに進化させるためのリソースを特定できる知見を有しており、現在および将来にわたってお客様の IT のニーズを満たすことができます。また、信頼されるアドバイザーとして、お客様からの機能強化のリクエストについてコミュニティに提案したり、コミュニティを指導したりすることができます。
3. **修復、管理、自動化を備えた統合分析**：Red Hat Enterprise Linux 環境が最適な動作を続けられるように、サブスクリプションには Red Hat Insights へのアクセスが含まれています。Insights は、環境（基盤となるサーバーと SAP や Microsoft SQL Server などのアプリケーションを含む）を分析するホスト型サービスのスイートであり、セキュリティ、コンプライアンス、可用性、安定性に影響を与える可能性のあるセキュリティの脅威、パフォーマンスのボトルネック、および構成ミスに IT チームがプロアクティブに特定して修正するのを助けます。サブスクリプションは、Red Hat Satellite や Red Hat Ansible® Automation Platform などの追加オファーをサポートしています。
4. **ライフサイクルサポートと柔軟性**：Red Hat は、複雑でコストのかかるアップグレード作業を強いられることなく、改善とセキュリティ修正を継続して受け取れるようにするさまざまなライフサイクルオプションを提供します。すべての Red Hat Enterprise Linux サブスクリプションで、各メジャーリリースに対して 10 年間のサポートが提供されます。追加のサブスクリプションサービスを利用すれば、一定期間特定のマイナーリリースを利用できるようになり、アップグレード計画の柔軟性がさらに高まります。
5. **サポートと専門知識**：サブスクリプションによって、電話とオンラインでのインシデントサポートに加え、リファレンス・アーキテクチャ、ドキュメント、動画、Red Hat エキスパートとのコラボレーティブなディスカッションなど、受賞歴のある知識ベースのサポートシステムを利用できます。さらに、Red Hat カスタマーポータルでは、サポートとベストプラクティスの共有だけでなく、継続的なセキュリティの脆弱性とその影響を緩和するためお客様のチームが実行できる重要なステップに関する情報を提供します。そして、Red Hat サービスの認定コンサルタントが、作業を加速して価値実現までの時間を短縮するお手伝いをします。これらのサービスは、有料サブスクリプションをご利用の場合のみ利用できます。
6. **セキュリティリソース**：Red Hat は、リスクを監視して特定し、プロアクティブにお客様への通知を行う専任のエンジニアチームを有しています。Red Hat セキュリティチームは、Red Hat Enterprise Linux の全バージョンに対して、サポートされているライフサイクル期間にセキュリティパッチの作成、テスト、提供を行うことにより、これらの脆弱性を修復します。エンジニアが提供するものには以下のものが含まれます。
 - ▶ **kpatch**：実行中の Linux カーネルに、再起動せずにパッチを適用できます。これにより、システム管理者は、実行時間の長いタスクの完了、ユーザーのログオフ、予定された SLA のメンテナンス時間を待つ必要なく、重要なセキュリティパッチをすぐにカーネルに適用できます。セキュリティや安定性を犠牲にすることなく、アップタイムをより詳細に制御できます。
 - ▶ **Red Hat の共通脆弱性識別子 (CVE) データベース**：MITRE が管理する最終版にリンクしており、Red Hat 固有のソフトウェア実装における重大度やリスクに関する追加情報を提供します。Red Hat が問題にどのように対処したかを説明し、お客様の環境を脅威から保護するために何をすべきかについて詳細なガイダンスを提供します。これにより、お客様はセキュリティへの取り組みを優先し、より注力することができます。

- ▶ Red Hat Enterprise Linux とその他の製品を対象とした、政府および民間の主要なセキュリティ基準の認定とコンプライアンス・エンジニアリング

支援:

7. Red Hat Enterprise Linux に対する可視性と影響: Red Hat Enterprise Linux はアップストリーム・プロジェクトに基づいているため、お客様は Red Hat Enterprise Linux に組み込まれたコンポーネントに影響を与え、ロードマップの推進に貢献することができます。サブスクリプションにより、アップストリームから 3 年間の製品ロードマップまで、製品プロセス全体を把握できるため、組織は独自のライフサイクルを計画しやすくなります。
8. オープンソース・プロジェクトにおけるコミュニティのリーダーシップ: Red Hat は、オープンソース・コミュニティでのリーダーシップと主要な貢献を通じて、お客様とパートナーが必要としているものを提唱します。サブスクリプションの利用料金は、Red Hat Enterprise Linux の将来の機能としてお客様の要件を提唱できるよう、アップストリーム・プロジェクトの継続的なサポート資金として使われます。また、Red Hat は Fedora のようなコミュニティ・プロジェクトを後援することでイノベーションを促進します。これらのコミュニティは、Red Hat だけでなく、すべての人からフィードバックを得られるようにするコミュニティ主導のガバナンスモデルでテクノロジーを作成、テスト、統合することができます。そして、CentOS Stream のようなプロジェクトは、製品のライフサイクル中にコミュニティによる貢献が継続されるように作られています。
9. ハードウェア、ソフトウェア、クラウドプロバイダーとのパートナーシップ: サブスクリプションの利用料金は、Red Hat Enterprise Linux を認定済みの大規模なハードウェアエコシステムと統合するために必要なリソースの資金として使われます。これにより、認定済みのエンタープライズ・ソフトウェア・アプリケーションに安定した高性能プラットフォームが提供されます。サブスクリプションの利用料金は、Red Hat Enterprise Linux を実行し、すべての主要な認定クラウドプロバイダーと統合するために必要なエンジニアリングの資金としても使われます。これらのパートナーシップは、Red Hat Enterprise Linux エンジニアリングチームとの早期、継続的、集中的な技術協力につながり、その結果、次の Red Hat Enterprise Linux リリースの前に問題が特定され、修正されます。これにより、お客様は希望するアーキテクチャとハードウェアを使用して Red Hat Enterprise Linux で標準化することができます。
10. セキュリティのニーズ: Red Hat はセキュリティ基準を定める団体からの信頼を得ており、コミュニティ、行政、業界団体にお客様の声を伝えることができます。Red Hat は、他の組織のさまざまなセキュリティチームとも提携しており、公開前の脆弱性情報にアクセスすることができます。Red Hat は、セキュリティの問題と、その問題が当社の製品に当てはまるかどうかを評価し、必要に応じてパッチや修正を発行します。そして、Red Hat Enterprise Linux には、Identity Management、SELinux、Linux 監査サブシステム、コントロールグループなどのさまざまなセキュリティ機能も含まれており、行政部門や高度に規制された業界のほか、資産や評判を守ることを重要とするお客様の実際的な問題に対するサポートを提供します。Red Hat は、これらのコラボレーションの触媒として機能し、多様な支援者が互いにつながり、共通の問題をチームとして解決できるようにします。

プロダクション環境向けのサポート

Red Hat のサポートは、各分野の知識豊富なエキスパートにより、お客様とのコラボレーションを通じて提供されます。Red Hat のサポートプロセスを利用すると、ソフトウェアの開発やテストの担当者として、基盤となるテクノロジーのオープンソース開発を目にする機会を得られます。お客様からご連絡いただければ、インフラストラクチャの計画、テスト、デプロイ、保守、アップグレードのすべての段階で、Red Hat の専門知識を活用できます。このようなやり取りは、サブスクリプションの一環として利用できます。

Red Hat が提供するサポートには、開発とプロダクションの 2 つのモードがあります。このセクションでは[プロダクションサポート](#)について説明します。このサポートは Red Hat のパートナーの協力により提供される場合があります。開発サポートについては、このガイドの「開発環境」のセクションで説明しています。

プロダクション環境をカバーする Red Hat サブスクリプションには 2 つのサポートレベル ([Standard](#) と [Premium](#)) があり、初期対応と継続的対応の時間を定義する SLA が異なります。

Red Hat は、エンタープライズ・ハードウェア、ソフトウェア、および認定クラウドプロバイダーに対してサードパーティのサポートも提供します。Red Hat 製品認定は、サードパーティのツールとソリューションが Red Hat Enterprise Linux でテスト済みであり、認定されているという信頼と保証を提供します。テスト済み、認定済み、サポート対象のコンポーネントの全リストは、[Red Hat Ecosystem Catalog](#) を参照してください。サポート対象のコンポーネントとサポート対象ではないコンポーネントに関する一般的な情報は、[サードパーティ・コンポーネント](#)を使用している顧客に対して、[Red Hat はどのようなサポートを提供していますか?](#)を参照してください。

表 1. Red Hat Enterprise Linux サブスクリプションの SLA

Red Hat Enterprise Linux のサービスレベル (詳細は プロダクションサポートサービス利用条件 を参照)			
サービス	Self-support	Standard	Premium
対象時間	なし	通常の営業時間	通常の営業時間 (重大度 1 と 2 の場合は 年中無休)
サポート手段	なし	Web および 電話	Web および 電話
ケース数	なし	無制限	無制限

対応時間			
重大度	Standard		Premium
	初期および継続的対応	初期対応	継続的対応
重大度 1(緊急): プロダクション環境でのソフトウェアの使用に重大な影響を与える問題(プロダクションデータの損失やプロダクションシステムの機能障害など)。この状況によってビジネス活動が停止し、手続きのな回避策がありません。	1時間(営業日内)	1時間	1時間または合意済みの時間
重大度 2(高): ソフトウェアは機能しているが、プロダクション環境での使用が大きく制限される問題。この状況によって一部のビジネス活動に大きな影響が生じ、手続きのな回避策がありません。	4時間(営業日内)	2時間	4時間または合意済みの時間
重大度 3(中): プロダクション環境または開発環境で、一部の重要ではないソフトウェアが使用できなくなる問題。	1営業日	4時間(営業日内)	8時間(営業日内)または合意済みの時間

対応時間			
<p>プロダクション環境にとってはビジネスへの中から低程度の影響があります。ただし、手続きの回避策の使用などにより、ビジネス活動は続行できます。開発環境にとってはプロジェクトを続行できない、またはプロダクション環境に移行できない状況にあります。</p>			
<p>重大度 4 (低):</p> <p>使用方法に関する一般的な質問、ドキュメントの誤りの報告、または今後の製品強化または修正の提案。プロダクション環境にとっては、ビジネスまたはシステムのパフォーマンスまたは機能に対する影響は低いか、影響はありません。開発環境にとってはビジネスへの中から低程度の影響があります。ただし、手続きの回避策の使用などにより、ビジネス活動は続行できます。</p>	2 営業日	8 時間 (営業日内)	2 営業日または合意済みの時間

用語集

ゲスト: ハイパーバイザーで稼働中の仮想マシン内で実行されるソフトウェアのインスタンス。Red Hat サブスクリプションモデルでは、ゲストは物理システムと関連付けられます。

物理ノード: ソフトウェア全体またはその一部をインストールまたは実行する物理システム。サーバー、ワークステーション、ラップトップ、ブレード、または状況に応じてその他の物理システムが該当します。

ソケット: マザーボード上の中央処理装置 (CPU) ソケット。

ソケットペア: 1つのシステム上にある最大 2 つのソケットで、各ソケットには 1 つの CPU が搭載されています。それぞれ 1 つのソケットが占有されている 2 台のサーバーは、別個に計上する必要があります。つまり、各サーバーに 1 つずつ、合計 2 本のサブスクリプションを購入することになります。

スタッキング: 複数のサブスクリプションを購入して、マルチソケットマシンに対応する機能。たとえば、サブスクリプションのベースユニットは 1 つのソケットペアです。8 ソケットマシンに対応するには、4 本のベースサブスクリプションを購入することになります。

システム: ソフトウェア全体または一部をインストールまたは実行するシステム。システムには、インストールまたは実行されるソフトウェアの各インスタンスが含まれ、サーバー、ワークステーション、ラップトップ、仮想マシン、ブレード、ノード、パーティション、アプライアンス、エンジンが、状況に応じてこれに該当します。

仮想ノード: 仮想マシンまたはコンテナで、全体またはその一部が実行されるソフトウェア・インスタンス。

サブスクリプション・パッケージ・モデル

今日の複雑なインフラストラクチャ環境は、物理、仮想、クラウドのデプロイメントが組み合わされて構築されているため、柔軟に選択できる購入モデルが必要です。Red Hat Enterprise Linux Server サブスクリプションモデルでは、購入のベースを選択すること、サブスクリプションをスタッキングして購入を効率化すること、物理から仮想やクラウド、またはその逆にサブスクリプションを移行して変化する要件に対応することが可能です。

注: IBM Z および LinuxONE を利用している場合、Red Hat Enterprise Linux では物理ノード全体にエンタイトルメントを付与する必要はなく、Red Hat Enterprise Linux によって使用されるコアのみが必要になります。IBM Z と LinuxONE では、これを「サブキャパシティ」エンタイトルメントと呼んでいます。Red Hat Enterprise Linux 向けの IBM Z および LinuxONE 環境で使用可能なコアのサブセットのみを利用している場合、Red Hat Enterprise Linux インスタンスの実行に使用されるサブセットのサブスクリプションのみが必要です。これは、CPU プーリング、キャッピング、別個の論理パーティション (LPAR) などの手段によって、CPU パーティションの作成方法に関係なく適用されます。

各物理ノードのソケットペアまたは 2 つの仮想ノード

Red Hat のお客様は、Red Hat Enterprise Linux 製品のデプロイを物理ベースにするか仮想ベースにするかを選択できます。Red Hat Enterprise Linux を物理ハードウェアにデプロイする場合、サブスクリプションは使用するシステム上のソケットペアの数がベースになります。仮想環境に Red Hat Enterprise Linux をデプロイする場合、オンプレミスか、パブリッククラウドのようなサードパーティのサービスでホストされるかに関係なく、サブスクリプションは製品を実行する仮想ノードの数がベースになります。物理サーバーおよび仮想サーバーで Red Hat Enterprise Linux サブスクリプションを取得することにより、仮想ソケットにかかわらず、最大 2 つのソケットまたは 2 つの仮想ノードを持つ物理ノードでそのサブスクリプションを使用することができます。**このモデルが適用されるサブスクリプションには、以下のものがあります。**

- ▶ Red Hat Enterprise Linux Server Standard および Premium
- ▶ Red Hat Enterprise Linux アドオン

Self-support サブスクリプション

- ▶ Red Hat カスタマーサポートは利用できません。
- ▶ 他のサブスクリプションとスタッキングできません。
- ▶ プロダクション環境向けではありません。
- ▶ Red Hat Cloud Access では使用できません。
- ▶ エントリーレベルのサーバー・サブスクリプションは、Self-support でのみ利用可能です。物理的なシステム上のみデプロイでき、スタックすることはできません。

仮想デプロイ・サブスクリプション

Red Hat では、Red Hat Enterprise Linux 仮想インスタンスを個数無制限で実行できるサブスクリプションモデルも提供しており、高密度の仮想環境に最適です。このサブスクリプションモデルは物理ソケットペアをベースとして提供されます。

ゲスト数無制限のモデルのサブスクリプションには、以下のものがあります。

- ▶ Red Hat OpenStack® Platform
- ▶ Red Hat Enterprise Linux for Virtual Datacenters
- ▶ Red Hat Enterprise Linux アドオン

スタッキング

スタッキングは、Red Hat Enterprise Linux サブスクリプションを集約して、任意のサイズの物理サーバーに柔軟に適應できます。ベースの Red Hat Enterprise Linux モデルにはソケット 2 つの権利が含まれ、2 ソケットサーバーに対してはこれだけで十分です。4 ソケットサーバーの場合は、2 本のサブスクリプションが必要になります。同様に、8 ソケットマシンでは 4 本のサブスクリプションが必要です。このようにして、サブスクリプションを「積み上げて (スタッキングして)」、どのようなサイズのシステムにも拡張できます。さらに、物理インフラストラクチャが変更された場合、サブスクリプションを調整してインフラストラクチャに合わせることができます。サブスクリプションの数を増やさなくても、2 台の 2 ソケットシステムと 1 台の 4 ソケットシステムとを交換できます。

サブスクリプションの可搬性

サブスクリプションの可搬性により、別の観点での柔軟性が増します。Red Hat に連絡して利用条件を調整しなくても、2 ソケットの物理サブスクリプションを、仮想インスタンス 2 つのサブスクリプションに転用できます。仮想インスタンスのペアを物理ソケットペアとして転用することもできます。これにより、インフラストラクチャを物理から仮想に継続的に移行できます。物理と仮想のデプロイメント間でサブスクリプションを移行する機能は、Red Hat Enterprise Linux Server とそのアドオンに適用されます。

サブスクリプション注文の構成方法

Red Hat Enterprise Linux Server のサブスクリプションモデルには、以下の特徴があります。

- ▶ 各物理ノードのソケットペア、または 2 つの仮想ノードに基づく
- ▶ 物理、仮想、クラウドの各デプロイメントで使用できる
- ▶ スタッキング可能
- ▶ **Standard** または **Premium** サポートを選択可能

サブスクリプションの適正な本数と種類を決定する、基本的な質問があります。簡単にするため、質問は、物理環境または仮想環境のいずれかがあり、低密度環境であることを前提としています。つまり、実行されるゲスト数はシステムあたり 4 以下とします。実際には、さまざまなハイパーバイザーがあるハイブリッド環境や、高密度と低密度の環境が混在している場合があります。「サブスクリプションのシナリオと推奨」のセクションでは、混在およびオープン・ハイブリッドクラウド・デプロイ環境の例をいくつか取り上げます。

1. 購入するサブスクリプションの対象は、物理環境と仮想環境のどちらですか。回答が物理環境なら、ステップ 2 に進みます。仮想環境なら、ステップ 3 に進みます。
2. 標準的な物理サーバー構成は、1 ソケット、2 ソケット、4 ソケット、8 ソケットです。
 - a. 各種のソケット構成ごとに、いくつのシステムがありますか。
 - b. 保有する 1 ソケットシステムの数を数えます。それぞれに、ソケットペア・サブスクリプションが必要です。このタイプのサブスクリプションは、異なる物理システム間で分割できません。
 - c. マルチソケットシステムの場合、ソケットの数を合計して 2 で割り、その結果を 1 ソケットシステムの数に加えます。この合計が、物理サーバーを利用するために購入するサブスクリプションの数になります。
 - d. ステップ 4 に進みます。
3. 仮想サーバーはいくつありますか。
 - a. 仮想インスタンスの数を 2 で割ります。これが、仮想環境内のゲストに購入するサブスクリプションの数です。
 - b. ステップ 4 に進みます。
4. どのアドオンを組み込みますか。アドオンには同じソケットペアのサブスクリプションモデルが適用され、Red Hat Enterprise Linux サブスクリプションと同様に、物理システムと仮想システム間で移行できます。
5. デプロイメントには、Standard と Premium のどちらのサポートサービスレベルが必要ですか。

以下のワークシートは、単純なデプロイシナリオの計算例を示しています。

サンプルワークシート 1: 物理レイヤーのプロビジョニング

算定方法	システム	ソケットペア	サブスクリプション
1 ソケットシステムの数	10	5	10 (物理システムあたり 1 本必要)
2 ソケットシステムの数	10	10	10 (ソケットペアあたり 1 本)
4 ソケットシステムの数	2	4	4 (ソケットペアあたり 1 本)
8 ソケットシステムの数	2	8	8 (ソケットペアあたり 1 本)
購入するサブスクリプションの数			32

サンプルワークシート 2: 仮想環境へのゲストの追加

算定方法	数
ゲスト数	20
ゲスト数を 2 で割って購入するサブスクリプション数を算出	10

サンプルワークシート 3: 仮想環境のセットアップ

これらのソリューションは仮想化のユースケース向けで、このような種類のデプロイメントに対して全体的なコスト効率に優れています。さらに複雑な仮想化環境については、「サブスクリプションのシナリオと推奨」のセクションをご覧ください。

ハイパーバイザー向けの算定方法	ソケットペア	サブスクリプション
1 ソケットシステムの数	10	10 (システムあたり 1 本)
2 ソケットシステムの数	10	10 (ソケットペアあたり 1 本)
4 ソケットシステムの数	2	4 (ソケットペアあたり 1 本)
8 ソケットシステムの数	2	8 (ソケットペアあたり 1 本)
ハイパーバイザーに購入するサブスクリプションの数		32

ゲスト向けの算定方法	数
ゲスト数	40 (仮想インスタンス)
ゲスト数を 2 で割って購入するサブスクリプション数を算出	20
購入するサブスクリプションの総数	52

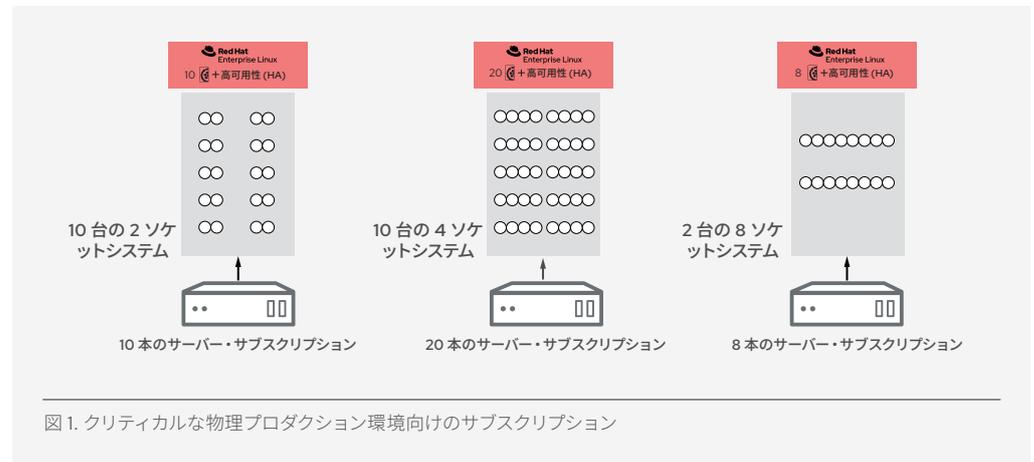
サブスクリプションのシナリオと推奨

このセクションのサブスクリプションのシナリオは、前述のワークシートを発展させ、実際のデプロイメントに見られる高可用性などの要素を追加しています。

物理プロダクション環境

物理プロダクション環境には一般にソケット数が 1、2、4、8、またはそれ以上のサーバーがあり、可用性、パフォーマンス、または拡張性を強化するために Red Hat アドオンが追加されていることがよくあります。図 1 に、クリティカルなプロダクション環境に対応するために必要な Red Hat Enterprise Linux Server のサブスクリプションの数を示します。

クリティカルなプロダクション環境での Red Hat Enterprise Linux Server のサブスクリプションの数



以下のワークシートでは、図 1 に示されているサブスクリプションの割り当てについて詳しく説明します。この例には 1 ソケットシステムが含まれていないことに注意してください。

サンプルワークシート 4: クリティカルな物理プロダクション環境のセットアップ

算定方法	ソケットペア
ソケット数	76
ソケット数を 2 で割って Red Hat Enterprise Linux Server のサブスクリプション数を算出	38
High Availability Add-On のサブスクリプション数	38

仮想プロダクション環境

仮想環境には、ハイパーバイザーをホストする物理サーバーに加えて、仮想ゲストが含まれます。図 2 に示す構成では、ハイパーバイザーは Red Hat Virtualization で、ゲストはすべて Red Hat Enterprise Linux であると仮定しています。この構成は低密度のプロダクション環境で、ハイパーバイザーで同時実行されるゲスト数は 4 以下です。

注: Red Hat は、Red Hat Enterprise Linux Server 上の KVM ハイパーバイザーで実行される、サポート対象のあらゆるオペレーティングシステム (OS) の仮想化ゲストで多数の仮想 CPU をサポートします。Red Hat Enterprise Linux で KVM を使用した仮想化の制限のリストは、[Red Hat Enterprise Linux で KVM を使用した仮想化の制限](#)を参照してください。ネットワークのセグメンテーション、ロードバランシング、永続性など、より堅牢な管理が必要な場合は、Red Hat OpenShift Virtualization または Red Hat OpenStack Platform を検討してください。これらは、大規模仮想化向けにサポートされるハイパーバイザーと管理ツールを提供します。

Microsoft Hyper-V、VMware、Nutanix など、Red Hat Enterprise Linux の実行がテスト済みおよび認定済みのハイパーバイザーの詳細は、[Red Hat Enterprise Linux の実行が認定されているハイパーバイザー](#)を参照してください。

クリティカルな仮想プロダクション環境での Red Hat Enterprise Linux Server のサブスクリプションの数

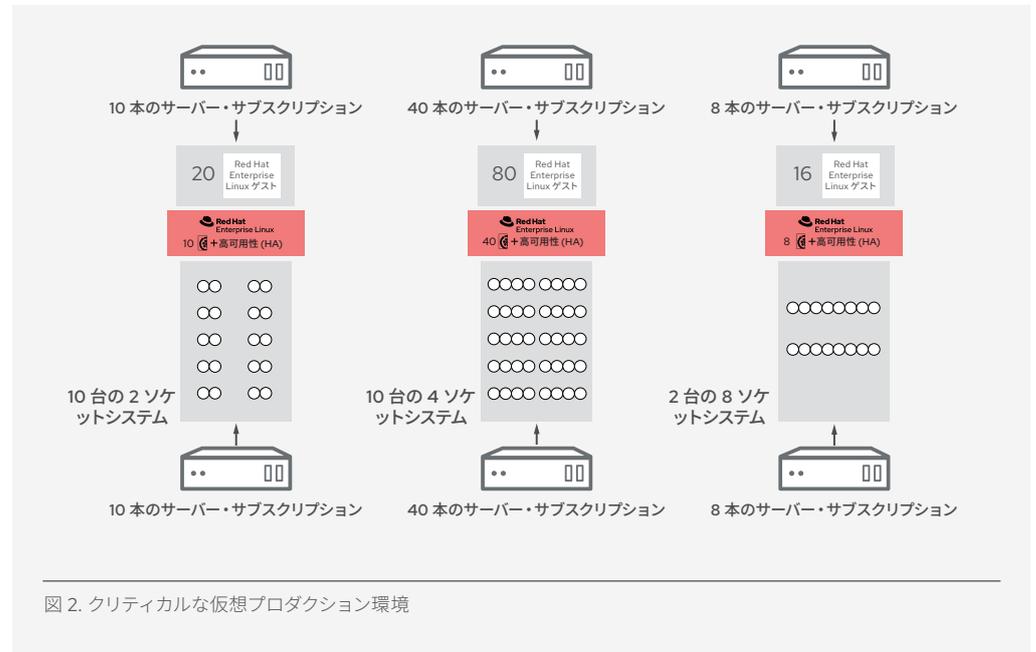


図 2 は、仮想ゲストが追加されている点を除いて、図 1 と同じです。前提条件として、クリティカルな環境では、このクラスターの各ノードは高可用性で実行される必要があります。仮想化プロダクション環境でも、物理プロダクション環境と同じ High Availability Add-On を利用します。以下のワークシートは、追加されたゲスト向けの算定方法を示します。

サンプルワークシート 5: ゲスト向けサブスクリプションの算定

ゲスト向けの算定方法	仮想インスタンス	備考
ゲスト数	116	インスタンススペースの仮想パッケージには物理システムまたはソケットペアの算定は不要です。
ゲスト数を 2 で割って Red Hat Enterprise Linux Server のサブスクリプション数を算出	58	これらのサブスクリプションは物理ソケットペアのサブスクリプションに転用できます。

図 3 のシナリオでは、仮想化環境は 100% Red Hat Enterprise Linux 環境であると仮定しています。図 3 に、ハイパーバイザーが VMware でゲストが Red Hat Enterprise Linux である環境を示します。

VMware での Red Hat Enterprise Linux Server のサブスクリプションの数

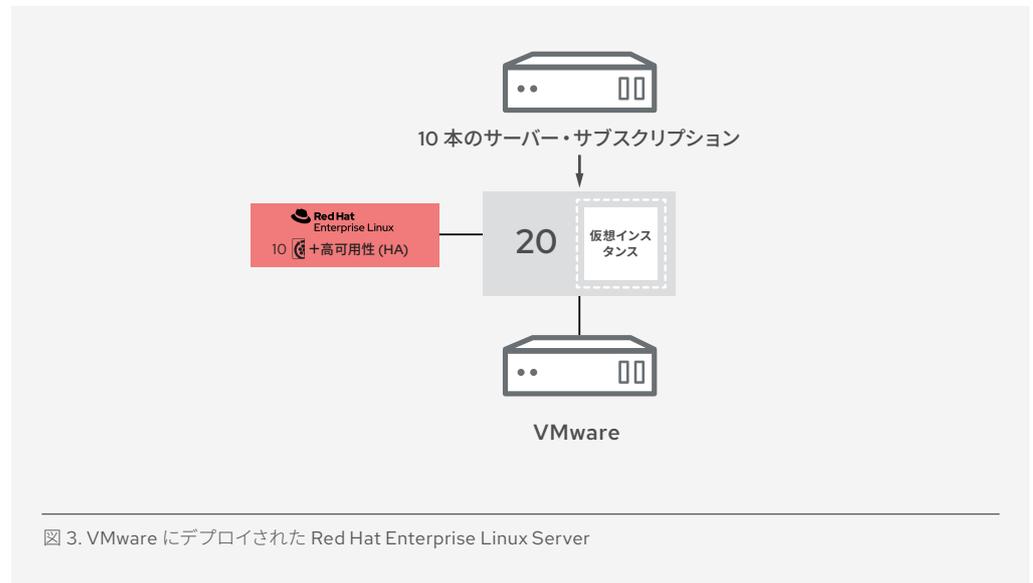


図 3. VMware にデプロイされた Red Hat Enterprise Linux Server

以下のワークシートは、図 3 のデプロイに対応するために必要なサブスクリプションの算定方法を示しています。

サンプルワークシート 6: 仮想化環境での Red Hat Enterprise Linux 向けサブスクリプションの算定

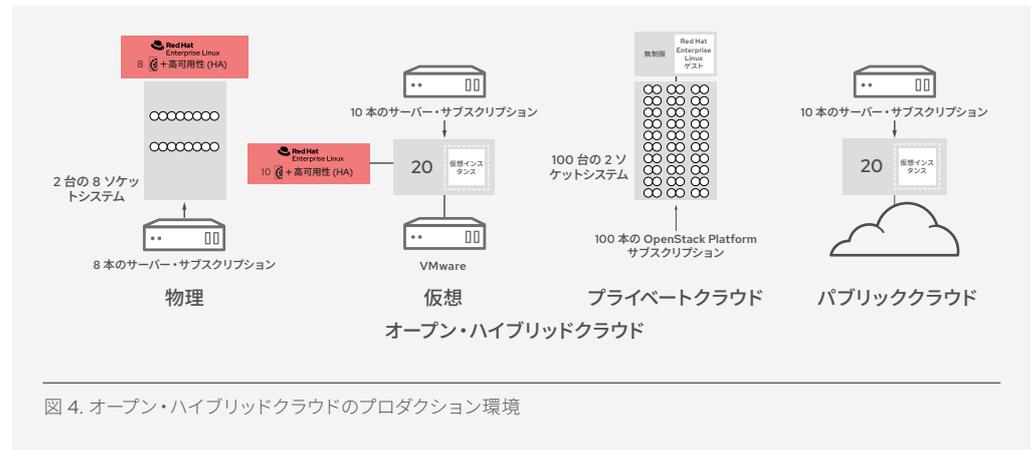
ゲスト向けの算定方法	仮想インスタンス	備考
ゲスト数	20	
ゲスト数を 2 で割って Red Hat Enterprise Linux Server のサブスクリプション数を算出	10	これらのサブスクリプションは物理ソケットペアのサブスクリプションに転用できます。
High Availability Add-On のサブスクリプション数	10	すべてのアドオンを仮想インスタンスで使用できます。 これらのサブスクリプションは物理ソケットペアのサブスクリプションに転用できます。

オープン・ハイブリッドクラウド

Red Hat ではオープン・ハイブリッドクラウド環境を、物理、仮想、プライベートクラウドまたはパブリッククラウドのデプロイの組み合わせを含む環境と定義しています。Red Hat Enterprise Linux ポートフォリオには、このすべての環境に対応するサブスクリプションがあります。以下の例は、前述の例を基にしています。図 4 では、物理環境と仮想環境は同じですが、プライベートクラウドとパブリッククラウドのコンポーネントが追加されています。

Red Hat のオープン・ハイブリッドクラウド・ポートフォリオを構成するアーキテクチャと製品の詳細については、[ハイブリッドクラウドとは](#)をご覧ください。

ハイブリッドクラウド環境での Red Hat Enterprise Linux Server のサブスクリプションの数



オープン・ハイブリッドクラウド環境の物理ホストシステムとゲストは、Red Hat OpenStack Platform のサブスクリプション対象です。以下のワークシートは、プライベートクラウドおよびパブリッククラウド向けのサブスクリプション購入の算定方法です。

サンプルワークシート 7: プライベートクラウド環境向けサブスクリプションの算定

物理マシン向けの算定方法	ソケットペア	備考
ソケット数	200	
ソケット数を 2 で割って Red Hat OpenStack Platform のサブスクリプション数を算出	100	この例には 1 ソケットシステムはありません。

ゲスト向けの算定方法	仮想インスタンス	
プライベートクラウドのゲスト数	無制限	
Red Hat OpenStack Platform サブスクリプションには無制限のゲスト数が含まれる	0	

サンプルワークシート 8: パブリッククラウド環境向けサブスクリプションの算定

パブリッククラウド向けの算定方法	仮想インスタンス	備考
仮想インスタンス数	20	
仮想インスタンス数を 2 で割って Red Hat Enterprise Linux Server のサブスクリプション数を算出	10	これは物理サーバーの場合と同じ種類のサブスクリプションです。デプロイ先の環境を、物理、仮想、またはクラウドから選択できます。

ハイパフォーマンス・コンピューティング (HPC)

ここで取り上げるのは、ハイパフォーマンス・コンピューティング (HPC) 環境に必要なサブスクリプションです。Red Hat はこれらを、多数の同一の非対話型「コンピュート」ノードで構成され、それぞれがスケジューラーをホストする「ヘッド」ノードによってジョブを供給されるものと定義しています。ほとんどの場合、ジョブはメッセージ・パッシング・インタフェース (MPI) などのツールキットを使用して複数のコンピュートノードにまたがります。

HPC のユースケース

- ▶ ヘッドノード: Red Hat Enterprise Linux for HPC Head サブスクリプションを使用します。
- ▶ コンピュートノード: Red Hat Enterprise Linux for HPC Compute サブスクリプションを使用します。
- ▶ ログインノード: Red Hat Enterprise Linux Standard サブスクリプションを使用します。
- ▶ ストレージノード: Red Hat Enterprise Linux Standard サブスクリプションを使用します。

障害復旧

障害復旧は、プロダクション環境設計において重要な要素です。Red Hat には障害復旧システム向けの購入ポリシーがあり、最も一般的なシナリオである、ホット、ウォーム、コールドの各種バックアップに対処します。

ホットバックアップ: サーバーは頻繁に稼働状態になり、即座にプロダクションモードになる準備が整っています。これは一般に、クラスタ内のフェイルオーバーによる動作です。

この場合、プロダクションサーバーに 1 本、ホットバックアップ・サーバーに 1 本の、合計で 2 本のサブスクリプションが必要です。ホットバックアップが必要な各サーバーについて、サブスクリプションの SLA や構成は同一である必要があります。ホットバックアップ障害復旧サブスクリプションのメーカー推奨価格 (MSRP) は、標準サブスクリプションの MSRP と同額です。

ウォームバックアップ: サーバーは定期的にオンになり、プロダクションサーバーからデータのバックアップや Red Hat の Content Delivery Network (CDN) からアップデートを受信します。定期アップデートの実行間隔が 60 日より短くなることはありません。ウォームバックアップは、たとえばミラーリング、レプリケーション、ログ配布などの事例に使用されます。

この場合、2 本のサブスクリプションが必要です。1 本は通常のプロダクション用途、1 本は障害復旧サブスクリプション用途として使用されます(ウォームバックアップ障害復旧サブスクリプションの MSRP は、標準サブスクリプションの MSRP から 50% 割引されます)。

コールドバックアップ：サーバーにソフトウェアがインストール済みで構成済みですが、障害が発生するか、定期的な障害復旧手順のテストが行われない限り、オフになっています。Red Hat Enterprise Linux の場合、一部をあらかじめロードしておくことができます。ただし、障害が発生しない限り Red Hat の CDN を使用してシステムのアップデートを行うことはできません。障害発生時には、障害が発生したマシンの支払い済みサブスクリプションがコールド・バックアップ・サーバーに移転されます。

この場合、2 本のサブスクリプションは必要ではありません。使用するのは、常に 1 本のサブスクリプションだけです。Red Hat のサブスクリプションをご利用のお客様は、ソフトウェアの一部をコールド・バックアップ・マシンにあらかじめプロビジョニングできます。ただし、このように事前プロビジョニングしたサーバーをコールドバックアップのユースケース以外に使用したために、実行されている Red Hat Enterprise Linux のユニット数がお客様のサブスクリプション数を超過した場合、お客様は Red Hat にその分のサブスクリプション料金を支払う義務があります。

開発環境

Red Hat Enterprise Linux には、開発チームをサポートするさまざまな種類のサブスクリプションがあります。サブスクリプションを選択する際には、チームの規模と必要なサポートレベルが判定要因となります。

1. チームの規模

- ▶ 25 名以上のチームの場合、Red Hat Enterprise Linux Developer Support、Professional には、対応時間が 2 営業日の開発者サポートが含まれています。
- ▶ 25 名以上のチームの場合、Red Hat Enterprise Linux Developer Support、Enterprise には、対応時間が 4 時間という最高レベルの開発者サポートが含まれています。
- ▶ 個人開発者の場合、Red Hat Enterprise Linux Developer Suite はセルフサポート型の Linux ディストリビューションであり、すべての Red Hat Enterprise Linux アドオン、Red Hat Software Collections、Red Hat Developer Toolset が含まれています。このサブスクリプションは開発目的専用です。

2. サポートサービス

- ▶ Self-support では、ソフトウェア・アップデート、Red Hat ナレッジベース、Red Hat カスタマーポータル の技術コンテンツを利用できます。Red Hat が提供している、電話または Web によるサポートは利用できません。
- ▶ Professional サポートには、標準営業時間内の Web および電話による回数無制限の問い合わせが追加され、対応時間は 2 営業日です。
- ▶ Enterprise サポートでも、標準営業時間内の Web および電話による回数無制限の問い合わせを利用できますが、対応時間は 4 営業日です。

すべての開発サブスクリプションには Red Hat Enterprise Linux Developer Program への加入権が含まれており、開発者は Red Hat Enterprise Linux を最大限に活用できるよう支援します。Red Hat Enterprise Linux Developer Program は、カスタムアプリケーションを構築するエンドユーザー、ポータブル・アプリケーションを開発する独立系ソフトウェアベンダー (ISV) および付加価値再販業者 (VAR)、顧客向けにアプリケーションをカスタマイズするシステムインテグレーターを対象とするプログラムで、開発者ツール、サブスクリプション、サポート、トレーニングを利用できます。

Red Hat Enterprise Linux for Workstations

Red Hat Enterprise Linux サブスクリプションの別のカテゴリとして、Workstation があります。シングルユーザーのユースケースの場合は、Red Hat Enterprise Linux for Workstations を検討してください。このサブスクリプションはインストールしたシステム単位で購入します。サブスクリプションの選択の際には、ユーザーの要件を検討してください。

- ▶ 複雑なアプリケーション、特にデジタルアニメーション、視覚効果、コンピュータ支援設計、エンジニアリング、地質調査、その他ビジュアライゼーションに重点を置いたワークロードなどで見られるような、グラフィックスを多用するアプリケーションのユーザー。
- ▶ GPU を集中的に使用するワークロード用のフロントエンド・モデリング・システムまたはインターフェースは、HPC クラスタまたはスーパーコンピュータにデプロイ可能。
- ▶ エンドユーザーが VM ベースのワークステーションを使えるようにするために、リモートアクセスまたは仮想デスクトップ・インフラストラクチャ (VDI) テクノロジーを使用する顧客のプライベートクラウド環境での仮想化デプロイメント。
- ▶ エンドユーザーが VM ベースのワークステーションを使えるようにするために、リモートアクセスまたは仮想デスクトップ・インフラストラクチャ (VDI) テクノロジーを使用する顧客のパブリッククラウド環境での仮想化デプロイメント (特に GPU で高速化されたインスタンス)。
- ▶ シングルユーザー用の 1 台または 4 台の VM 用のホスト (詳細は SKU の説明を参照してください)。
- ▶ デプロイメントターゲットが Red Hat Enterprise Linux または Red Hat OpenShift であるアプリケーション開発の場合。

Red Hat Enterprise Linux for Workstations は、x86 アーキテクチャ用の Premium、Standard、および Self-Support オプションで利用できます。

表 2. Red Hat Enterprise Linux for Workstations サブスクリプションの技術仕様

技術仕様	Red Hat Enterprise Linux for Workstations
x86	はい
最大物理 CPU (ソケット)	2
最大メモリー	無制限
最大仮想化ゲスト数	1 または 4

サブスクリプションの管理

Red Hat サブスクリプションを管理して、提供されるサービスとツールを活用するには、Red Hat Enterprise Linux に付属の Red Hat サブスクリプション管理 (またはコマンドライン・インターフェース) を使用してシステムを登録する必要があります。Red Hat では、Red Hat Enterprise Linux サブスクリプションの管理に役立つサービスやツールを用意しています。次のようなものがあります。

- ▶ **Red Hat Subscription Management:** Red Hat のシステム管理ツールを使用して、サブスクリプションのステータスと管理のためのツールを提供する、顧客主導のエンドツーエンド・ソリューション。製品にサブスクリプションを購入すると、Red Hat Subscription Management (RHSM) は、インベントリ内のどのシステムがサブスクリプションに登録されているかを追跡します。登録されたシステムは、Red Hat CDN からエラータ、パッチ、アップグレードを取得するだけでなく、サポートサービスを受けられます。Red Hat Subscription Management は Red Hat カスタマーポータルからアクセスできます。
- ▶ **Red Hat Insights:** Red Hat Enterprise Linux サブスクリプションに含まれており、主要な管理サービスを提供します。環境をプロアクティブに分析し、セキュリティ、パフォーマンス、可用性、および安定性における潜在的なリスクを特定し、修復ガイダンスを提供します。システム管理者はエージェン

トサポートを提供するだけで、これらの領域での潜在的な問題に関する日次レポートを取得できます。Red Hat Insights はシステム管理者に、ダウンタイムなどの問題を最小限に抑えるために必要な情報を提供します。

- ▶ **Red Hat Satellite:** Red Hat Satellite は、パッチ管理、プロビジョニング、構成管理、および監視機能を提供します。これらの機能によって、Red Hat Enterprise Linux システムのセキュリティを高め、効率的な運用、組織や法的な基準への準拠を維持できるようになります。また、割り当てられた利用可能なサブスクリプションと有効期限に関する詳細なレポートを提供して、サブスクリプション・インベントリーの管理を支援します。

サブスクリプションの更新

Red Hat サブスクリプションは、お客様が Red Hat と締結した契約に従い、一定期間のみ有効です。テクニカルサポート、セキュリティパッチ、製品アップグレード、パートナーとエキスパートのエコシステムへのあらゆる面への参加など、Red Hat サブスクリプションのすべてのメリットを失わずに利用し続ける唯一の方法は、期限切れになる前に更新することです。

サブスクリプション期間中は、お客様担当営業にいつでもご連絡いただくことができます。サブスクリプションの有効期限の 90 日前、60 日前、および 30 日前になると、契約で指定された担当者に Red Hat から通知の E メールが届きます。この通知にはサブスクリプションを更新する手順が記載されています。更新方法は、サブスクリプションの購入方法によって異なります。E メールが届かない、または誤った担当者に送信されたと思われる場合は、Red Hat Customer Service (1-888-733-4281) までご連絡ください。

サブスクリプションの利用条件

このセクションでは、Red Hat エンタープライズ契約の付録 1 に規定され、Red Hat サブスクリプションに適用される利用条件の一部をまとめます。付録 1 は拘束力を有する文書であり、このガイドの記載内容は付録 1 の利用条件に優先するものではありません。最新のローカライズ版をご覧ください ([Red Hat エンタープライズ契約および製品付属文書](#))。ご不明な点については Red Hat のお客様担当営業までお問い合わせください。

システムの対応範囲

- ▶ 契約では、お客様組織内の Red Hat Enterprise Linux がインストールされているすべてのシステムと仮想インスタンスにサブスクリプションを購入する必要があると規定されています。たとえば、Red Hat Enterprise Linux が 5 台の開発マシンと 10 台の 2 ソケット・プロダクション・システムにインストールされている場合、インストールされている Red Hat Enterprise Linux のバージョンに関係なくこれらのマシンを対象にできるサブスクリプションを購入する必要があります。これらがすべて 2 ソケットマシンの場合、プロダクションシステムをカバーするためには 5 本の開発者サブスクリプションと 10 本のサブスクリプションを購入する必要があります。サブスクリプションにより、都合に応じて最新バージョンにアップグレードすることが可能になります。
- ▶ サブスクリプションの総数がインストールされたシステムの総数と一致していれば、サブスクリプションを追加購入しなくても、同様の特性を持つシステムにサブスクリプションを移転することができます。
- ▶ Red Hat Enterprise Linux Server と関連するアドオンのサブスクリプションを、物理環境と仮想およびクラウドデプロイ環境との間で移行できます。サブスクリプションの利用条件の変更、サブスクリプションの追加購入、Red Hat への通知は不要です。たとえば、物理マシンに割り当てた 1 つのソケットペア向けにサブスクリプションを購入した場合、このソケットペアのサブスクリプションを仮想化またはクラウドデプロイの 2 つの仮想インスタンスを対象とするサブスクリプションに転用できます。その後、2 つのインスタンス向けのサブスクリプションを 1 つのソケットペアの割り当てに戻すことができます。

- ▶ 関連のない Red Hat Enterprise Linux for Server サブスクリプションを、Red Hat から許可を得ることなく、オフサイトまたはクラウド環境に移行することはできません。詳細については、Red Hat エンタープライズ契約の付録1を参照してください。

サポートサービスレベル

- ▶ Red Hat サブスクリプションを購入するとき、サポートサービスのレベルを選択する必要があります。開発者向けサポートレベルは Professional と Enterprise、プロダクション向けのサポートレベルは Self-support、Standard、および Premium です。Red Hat Enterprise Linux Server Entry Level と Self-support は一部の地域でのみ利用可能です。
- ▶ プロダクション向けのサポートでは、本番環境に使用されるソフトウェアのインストール、アプリケーションのテスト、使用方法、問題診断、バグ修正のサポートを受けられます。コード開発、システム設計、ネットワーク設計、アーキテクチャ設計、最適化、チューニングの推奨、セキュリティまたはポリシーの開発または実装、Red Hat ソフトウェアから使用できるサードパーティ・ソフトウェア、補足チャネル、プレビュー・テクノロジーについては、支援を受けられません。
- ▶ サブスクリプションは異なるサポートレベルで購入できます。たとえば、ビジネスに影響を与えるワークロードに対して Premium サポートサービスのサブスクリプションを購入し、重要度の低いワークロードには Standard サポートサービスのサブスクリプションを購入できます。サポートレベルを決定する際には、1つまたは複数のシステムが利用できなくなった場合の影響を理解することが重要です。たとえば、開発サーバーが利用できなくなっても、すぐに顧客に影響を与えるわけではありませんが、稼働していない開発者にかかるコストや製品の遅延を考慮した場合、ビジネスに大きな影響を与える可能性があります。レベルの高いサポートサービスを使用して、レベルの低いサポートサービスを割り当てたシステムのサポートを受けることはできません。たとえば、Standard サポートのシステムのサポートを依頼して、別のサブスクリプションに基づく Premium サポートを要求することはできません。
- ▶ アドオンは、関連付けられている Red Hat Enterprise Linux サブスクリプションの基礎となる SLA を継承します。たとえば、High Availability Add-On が Red Hat Enterprise Linux Server の Premium SLA サブスクリプションに関連付けられている場合、High Availability の Premium SLA が継承されます。
- ▶ 開発者向けサポートでは、インストール、使用方法、問題診断、バグ修正のサポートを受けられます。アプリケーションのアーキテクチャ、設計、開発、プロトタイピングについてのアドバイスも得られます。補足チャネルやプレビュー・テクノロジーから利用できるソフトウェアはサポートされません。

サブスクリプションとサービスの適切な使用

- ▶ Red Hat Enterprise Linux サブスクリプションの評価版は、所定の期間を超えて使用したり、評価の利用条件に明示的に規定された目的以外に使用したりすることはできません。
- ▶ ソフトウェアおよびサポートサービスのサブスクリプションは、社内利用のみに限定されます(「社内」には関係会社を含みます)。サブスクリプションをサードパーティに譲渡することはできません。
- ▶ サブスクリプションを想定外のユースケースに使用することはできません。たとえば、Red Hat Enterprise Linux for Workstations サブスクリプションをプロダクションサーバーとして使用することはできません。また、開発者サブスクリプションを使用してプロダクション向けのサポートを受けることはできません。

次のステップ

Red Hat Enterprise Linux サブスクリプションを購入したら、以下のことを実行していただく必要があります。

1. Red Hat カスタマーポータルに登録する
2. サブスクリプションを有効化する
3. サブスクリプションを関連付ける
4. ソフトウェアをダウンロードする

Red Hat カスタマーポータルへの登録

Red Hat サブスクリプションの価値を最大限に活用する最初のステップは、[Red Hat カスタマーポータル](#)への登録です。IT 組織の誰もが登録できます。アカウントごとの登録者数に制限はありません。

カスタマーポータルはサブスクリプション管理サービスとツールへの玄関口であり、サブスクリプションの有効化、権利付与、更新、管理、レポート処理を実行できます。これらのサービスとツールに加えて、カスタマーポータルにはナレッジベースと情報リソースの広範なライブラリがあり、初心者からエキスパートまでさまざまなユーザーをサポートします。

サブスクリプションの有効化

サブスクリプションを注文する前に Red Hat アカウントを作成した場合は、この手順を省略できます。ソフトウェアはアカウントに配信済みなので、権利付与のプロセスを開始できます。

サブスクリプションを注文した後に Red Hat アカウントを作成した場合は、まずサブスクリプションを有効化する必要があります。チームがインストールするソフトウェアに対応するサブスクリプションを有効化する必要があります。

カスタマーポータルの [Subscription (サブスクリプション)] タブにあるツールを使用して、サブスクリプションを有効化できます。サブスクリプション有効化ツールで、Red Hat から E メールで受け取った製品アクティベーション・コード (サブスクリプション番号とも呼ばれます) を入力します。その後、ソフトウェアのダウンロードを開始できます。

サブスクリプションの関連付け

最後のステップとして、システムを登録してサブスクリプションを関連付けます。サブスクリプションをシステムに関連付けるプロセスは、Red Hat サブスクリプション管理サービスまたは使用するツールによって異なります。サブスクリプションのインベントリーの関連付け、管理、レポート、更新の手順については、該当する [Red Hat 製品のマニュアル](#)を参照してください。

ソフトウェアのダウンロード

組織の管理者によってソフトウェアをダウンロードする権限が付与されているチームメンバーは、ソフトウェアのダウンロードとインストールを開始できます。デフォルトでは、Red Hat アカウントを最初に作成したユーザーが管理者です。管理者は、同一アカウント内に複数の管理者を指名できます。ソフトウェアは、[Red Hat 製品ダウンロード](#)からダウンロードできます。

Red Hat Enterprise Linux 製品

Red Hat 製品はサブスクリプション・ベースで利用できます。

製品	説明
Red Hat Enterprise Linux for Workstations	Red Hat Enterprise Linux for Workstations は、より強力なハードウェアで作業する高度な要件を持つユーザー向けに設計されており、高性能のグラフィックス、アニメーション、科学計算に最適化されています。Red Hat Enterprise Linux for Workstations は、アニメーション、コンピュータ支援設計およびコンピュータ支援エンジニアリング (CAD/CAE)、科学研究などの高性能でグラフィックスの多いワークロード向けに最適化された OS です。また、ホストする仮想マシン (VM) は 1 台か 4 台を選択できます。ワークステーションのユーザーが必要とするすべての機能とアプリケーションに加えて、プロビジョニングと管理のための開発ツールが含まれています。
Red Hat Enterprise Linux for High-Performance Computing	Red Hat Enterprise Linux for HPC は、費用効果の高い方法で HPC クラスタに対処する特別なユースケースに対応します。Red Hat Enterprise Linux for Server の標準コンポーネントに基づいており、標準のインストールとエンタイトルメントを使用します。HPC クラスタには、同じように構成された多数のサーバーがあり、ほとんどの場合、同じアプリケーションをすべてのサーバーで単一のジョブとして並行して実行し、1 つの回答のみを返します。
Red Hat Enterprise Linux for Real Time	Red Hat Enterprise Linux for Real Time は、レイテンシーの保証を必要とするアプリケーションでの使用向けに設計されています。レイテンシー (または応答時間) は、イベントとシステム応答の間の時間と定義され、通常はマイクロ秒 (μs) で測定されます。
Red Hat Enterprise Linux for Distributed Computing (DCS) (別名 Edge Server)	Red Hat Enterprise Linux for Distributed Computing (DCS) Server は、カスタマイズ可能なイメージ生成、リモートデバイスのアップデートの同期、インテリジェントなロールバックを提供し、エッジサイトでのアプリケーションとデータ処理の安定性を最大化する、一貫性と柔軟性に優れたセキュリティ重視の基盤を提供します。

開発者向け

製品	説明
Red Hat Enterprise Linux Developer Suite	<p>Red Hat Enterprise Linux Developer Suite サブスクリプションには、Red Hat Enterprise Linux Server、High Availability Add-On、Resilient Storage Add-On、Scalable File System Add-On、Extended Update Support Add-On、Red Hat Satellite、Red Hat Enterprise Linux for Real Time、Red Hat Software Collections、および Red Hat Developer Toolset が含まれています。このサブスクリプションは、Developer サポートサービス (Professional と Enterprise) または Production サポートサービス (Standard と Premium) では利用できません。このサブスクリプションの内容は開発目的専用で、プロダクション環境では使用できません。</p> <p>このサブスクリプションは新規販売用ではありません。Red Hat Developer サブスクリプション (個人用またはチーム用) をご覧ください。</p>
Red Hat Enterprise Linux Developer Support, Professional and Enterprise	<p>Red Hat Enterprise Linux Developer Support, Professional and Enterprise は、開発者関連のインシデントに 2 営業日に対応します。25 種類の Developer Suite サブスクリプションを含み、サポートインシデントに回数無制限に対応します。Developer は Red Hat にサポートコールを行う連絡担当者を 1 名指定します。このサブスクリプションでは Enterprise サポートを利用でき、インシデントレポートに 4 時間に対応します。</p> <p>このサブスクリプションは開発目的専用です。</p>

製品

説明

Red Hat Developer サブスクリプション (個人用)

個人開発者の Red Hat Enterprise Linux での開発を支援し、Red Hat ポートフォリオ全体へのアクセスを提供します。Red Hat Developer プログラムのメンバーは個人用サブスクリプション (1本) を利用可能で、開発、テスト、プロダクションなど、任意の目的で最大 16 の物理ノードまたは仮想ノードを使用できます。セルフサポート型で、主要なパブリッククラウド環境にデプロイできます。

このサブスクリプションは、[Red Hat Developer プログラム](#)を通じてセルフサービスで利用できます。個人のみが対象で、企業アカウントは対象外です。

Red Hat Developer サブスクリプション (チーム用)

開発作業向けの Red Hat Enterprise Linux です。新しいアプリケーションの開発とプロダクション環境への移行をより緊密に連携させることができます。組織内のすべてのチームが、同じプラットフォームでビルド、テスト、実行できます。開発、テスト、継続的改善 (CI) に使用するものであり、継続的デリバリー (CD) やプロダクションには使用できません。物理または仮想開発者ノード用の単一の組織用サブスクリプションです。セルフサポート型で、有料サポートのオプションもあります。

このサブスクリプションは、Red Hat の営業担当者かパートナーのアカウント担当者を通じて、Red Hat Enterprise Linux 上で実行するアプリケーションを開発する Red Hat のお客様に無料で提供されます。

プラットフォーム向け

製品	説明
Red Hat Enterprise Linux Server	Red Hat Enterprise Linux Server は、物理システム上に、ハイパーバイザー上のゲストとして、またはクラウド環境内にデプロイできる、汎用プラットフォームです。このサブスクリプションは、物理マシンで使用する場合はソケットペアで、または仮想マシンで使用する場合はインスタンスペアベースで購入できます。サブスクリプションはスタッキングできます。たとえば、2つのサブスクリプションをスタッキングして、1台の4ソケット物理サーバーのサブスクリプション要件を満たすことができます。
RHEL for Third Party Linux Migration	Red Hat Enterprise Linux for Third Party Linux Migration は、お求めやすい価格と単純化された変換プロセスにより、Red Hat Enterprise Linux をより利用しやすいものにします。CentOS Linux の EOL を過ぎてもさらに時間が必要な場合は、Red Hat Enterprise Linux 7 のライフサイクルサポートを最大4年間延長することができるため、より新しいリリースに移行する準備が整うまで環境の一貫性を維持できます。
Red Hat Enterprise Linux for Server Entry Level, Self-support	Red Hat Enterprise Linux for Server Entry Level は物理システムにのみデプロイできます。Self-support のみ利用できます。このサブスクリプションはスタッキングできません。このサブスクリプションで購入できる唯一のアドオンは Red Hat Satellite です。このサブスクリプションはプロダクション環境向けではなく、Red Hat Software Collections の利用対象になりません。
Red Hat Enterprise Linux for ARM	Red Hat Enterprise Linux Server for ARM および Red Hat Enterprise Linux for Server for HPC for ARM は、x86、IBM POWER、IBM Z などの複数のアーキテクチャをサポートする Red Hat 戦略の一環です。Red Hat Enterprise Linux for ARM は、高性能で信頼性が高く、セキュリティをより重視したプラットフォームを提供します。これには、物理、仮想、およびクラウドのデプロイメントにわたって一貫したアプリケーション環境が含まれます。

製品

説明

Red Hat Enterprise Linux for ARM (64K ページサイズの新カーネル)

64k ページサイズのカーネルによって、大規模データセットのワークロードに対応できる大容量の物理メモリーを搭載したデータセンター級 ARM サーバーを購入されるお客様に、最高クラスのパフォーマンスを提供します。これらのアプリケーションには従来の HPC ワークロード、大規模データベースの実装、人工知能と機械学習 (AI/ML) が含まれる場合があります。どちらのカーネル (4k および 64k) も ARM ベースの幅広いサーバーで問題なく動作しますが、64k カーネルは大容量の物理メモリーを搭載したマシンでの使用を想定しています。

Red Hat Enterprise Linux for IBM Power Little Endian

このサブスクリプションは、IBM Power システムに Red Hat Enterprise Linux を導入して大量のデータやクラウドデプロイメントをスケールアウトする場合や、需要の増加に伴って拡大するワークロードを処理するコストを管理するために、容量の少ないサーバーを追加する場合に適しています。このクラスのサーバーの性質上、関心をお持ちの場合は Red Hat のお客様担当営業にご相談の上、具体的なガイダンスを得る必要があります。この製品は、コアおよび論理パーティション (LPAR) ベースでサブスクリプション購入できます。LPAR は仮想マシンに相当するものです。

製品

Red Hat Enterprise Linux for IBM Z and LinuxONE with Comprehensive Add-Ons

説明

Red Hat Enterprise Linux for IBM Z and LinuxONE with Comprehensive Add-Ons には、アップタイムを増加させる Red Hat Enterprise Linux High Availability Add-On、Red Hat Enterprise Linux Extended Update Support (EUS) Add-On、Red Hat Enterprise Linux の最適化と管理を提供する Red Hat Satellite、無制限の仮想ゲスト、物理マシンからハイブリッド・マルチクラウドまで Red Hat Enterprise Linux を管理できるようにするプレミアムサポートが含まれます。このクラスのサーバーの性質上、関心をお持ちの場合は Red Hat のお客様担当営業にご相談の上、具体的なガイダンスを得る必要があります。

注：IBM Z および LinuxONE を利用している場合、Red Hat Enterprise Linux では物理ノード全体にエンタイトルメントを付与する必要はなく、Red Hat Enterprise Linux によって使用されるコアのみが必要になります。IBM Z と LinuxONE では、これを「サブキャパシティ」エンタイトルメントと呼んでいます。Red Hat Enterprise Linux 向けの IBM Z および LinuxONE 環境で使用可能なコアのサブセットのみを利用している場合、Red Hat Enterprise Linux インスタンスの実行に使用されるサブセットのサブスクリプションのみが必要です。これは、CPU プーリング、キャッピング、別個の論理パーティション (LPAR) などの手段によって、CPU パーティションの作成方法に関係なく適用されます。

製品

説明

Red Hat Enterprise Linux for SAP Solutions

Red Hat Enterprise Linux for SAP Solutions は、SAP のような重要なシステムのアップタイムと可用性を促進する高可用性基盤です。SAP HANA® および SAP S/4HANA® 向けの Red Hat Enterprise Linux High Availability ソリューション、ライブカーネルパッチ、インプレース・アップグレードなどの機能は、ダウンタイムがほとんど生じない SAP のプロダクション・デプロイメントを実現するための基盤です。このサブスクリプションには、標準の Red Hat Enterprise Linux と同じモデルが適用されます。

S/4HANA デプロイメントの下で SAP HANA を運用する必要があるお客様に適しています。豊富な機能セットを備えており、SAP 向けの Red Hat Enterprise Linux High Availability Add-On ソリューション、Red Hat Insights、Red Hat Satellite、EUS、Red Hat Enterprise Linux Update Services for SAP Solutions (E4S)、RHEL System Roles for SAP、そして SAP HANA 実行用の `compat-sap-c++` のようなソフトウェアパッケージがあります。

この SKU のユースケースは、Linux OS を導入して 2027 年までに SAP S/4HANA に移行する必要があるお客様、SAP のテクノロジーやソリューションへの依存度を下げたいと考えているお客様、新しく先進的かつ革新的なソリューションを日常業務に取り入れ、アジリティによって競争力を高めたいと考えているお客様に適しています。

Red Hat Enterprise Linux for Virtual Datacenters (VDC)

このサブスクリプションでは、Red Hat Virtualization、VMware、Microsoft HyperV といったサポート対象のハイパーバイザー上にある仮想化環境で、無制限の Red Hat Enterprise Linux ゲストをデプロイできます。このサブスクリプションは、Red Hat Virtualization の物理環境での使用はできません。Red Hat Enterprise Linux for Virtual Datacenters をプールするとき、クラスタ内のすべてのホストについて同一の SLA を購入する必要があります。クラスタ内のすべてのホストをサブスクリプションに登録する必要があります。クラスタ内のハイパーバイザーのサブセットでのみ実行される Red Hat Enterprise Linux ワークロードを制限および実施することがハイパーバイザーで許可されている場合、仮想化クラスタのサブセットにサブスクライブできません。

アドオン

注：Red Hat Satellite を除くすべての Red Hat Enterprise Linux アドオンは、Standard または Premium サブスクリプションでのみ利用できます。

製品	説明
Red Hat Enterprise Linux High Availability Add-On	High Availability Add-On では、クラスタ内のノード間でフェイルオーバーサービスを使用できるので、アプリケーションの可用性が向上します。最大 64 個のノードをサポートし、カスタマイズ可能なエージェントを使用する大半のアプリケーションや仮想ゲスト向けに構成できます。このサブスクリプションには Red Hat Enterprise Linux と同じモデルが適用されます。
Red Hat Enterprise Linux Resilient Storage Add-On	Resilient Storage Add-On は、クラスタファイルシステムが、同じブロックストレージ・デバイスにネットワーク経由でアクセスできるようにします。サーバーのクラスタに一貫したストレージを提供し、いずれかのサーバーに障害が発生しても保護されたグループ内の各サーバーが使用できるデータのプールを作成します。最大 16 ノードをサポートします。Resilient Storage Add-On には High Availability Add-On が含まれています。このサブスクリプションには Red Hat Enterprise Linux と同じモデルが適用されます。

製品

説明

Extended Update Support Add-On (2 年間)

Enhanced Extended Update Support Add-On
(4 年間)

Extended Update Support Add-On および Enhanced Extended Update Support Add-On は、特定の Red Hat Enterprise Linux マイナーリリースのサポート期間を一般提供後から最大 24 カ月または 48 カ月まで延長し、Red Hat Enterprise Linux および新規サーバーハードウェアの新機能を導入する時期を、お客様が柔軟に決定できます。社内要件に基づいてリソースおよびデプロイサイクルを効果的に計画し、システムのセキュリティを維持できます。このサブスクリプションには Red Hat Enterprise Linux と同じモデルが適用されます。注：Red Hat Enterprise Linux EUS (2 年間) は、x86 の Premium サブスクリプションに追加費用なしで含まれています。

Red Hat Enterprise Linux 8 の場合：EUS は、Red Hat Enterprise Linux Server (Intel/AMD64) Standard サブスクリプション、Red Hat Enterprise Linux for IBM Power LE サブスクリプションのアドオンとして購入できます。

Red Hat Enterprise Linux 9 の場合：EUS は、Red Hat Enterprise Linux Server (Intel/AMD64) Standard サブスクリプション、Red Hat Enterprise Linux for Workstations および Red Hat Enterprise Linux for IBM Power LE サブスクリプションのアドオンとして購入できます。Red Hat Enterprise Linux Server (x86) Self-Support は、EUS Add-On の対象外です。

Enhanced EUS (Red Hat Enterprise Linux 9 でのみ使用可能) は、Red Hat Enterprise Linux Server (Intel/AMD64) Premium または Standard サブスクリプション、Red Hat Enterprise Linux for IBM Power LE サブスクリプション および Enterprise Linux for IBM Z サブスクリプションのアドオンとして購入できます。Red Hat Enterprise Linux Server (x86) Self-Support および Red Hat Enterprise Linux Workstation サブスクリプションは、Enhanced EUS Add-On の対象外です。

詳細については、[拡張および強化アップデートのサポートページ](#)をご覧ください。

製品

説明

Extended Life Cycle Support	<p>Extended Life Cycle Support (ELS) は、一部の Red Hat Enterprise Linux サブスクリプション用の任意のアドオン・サブスクリプションです。延長ライフフェーズ中に利用できる ELS は、Red Hat Enterprise Linux の特定のバージョンの最後のマイナーリリースに対して、重大な影響を与えるセキュリティ修正、緊急度の高いバグ修正、およびトラブルシューティングを提供します。ELS の期間は、Red Hat Enterprise Linux の 10 年間のライフサイクルを超えて最低 36 カ月間継続します。10 年のライフサイクルが終了するまでに、Red Hat Enterprise Linux メジャーリリースからの移行を計画する必要があります。ELS により、短期の移行期間が追加されます。ELS Add-On は、IBM Z と x86 アーキテクチャ向けの Red Hat Enterprise Linux Premium および Standard で利用できます。Red Hat Enterprise Linux Self-support サブスクリプションでは購入できません。</p>
-----------------------------	---

管理向け

製品

説明

Red Hat Satellite Server	<p>Red Hat Satellite サブスクリプションに付帯する Red Hat Satellite Server は、Red Hat Enterprise Linux システムを効率的に管理するためのシステム管理プラットフォームです。パッチ管理、マルチシステム・プロビジョニング、構成管理、きめ細かなレポート機能を提供し、システムのセキュリティの強化と各種基準への準拠を支援します。</p>
Red Hat Satellite Capsule Server	<p>Red Hat Satellite サブスクリプションに付帯する Red Hat Satellite Capsule Server は Red Hat Satellite Server と併用され、追加の帯域幅、コンテンツのフェデレーション、ローカルレベルへのコンテンツのキャッシュ機能を提供します。</p>

製品

説明

Red Hat Satellite

Red Hat Satellite は、物理環境、仮想環境、クラウド、エッジを問わず、任意の Red Hat Enterprise Linux インフラストラクチャをプロビジョニングし維持管理するように作られたインフラストラクチャ管理ソリューションです。標準運用環境の定義とデプロイからパッチ適用、システムの保守やアップグレードまで、繰り返しタスクを効率化することでエンドツーエンドのシステム管理を単純化します。

Red Hat Insights と統合された Red Hat Satellite は、推奨パッチや脆弱性の更新、コンプライアンス要件の修復・修正によって可視性や Insights から得た分析を拡張します。Red Hat Insights で問題点を特定し、Red Hat Satellite で修復することで、所要時間を短縮しつつ手作業によるミスを減らし運用効率を向上させるだけでなく、システムのセキュリティや可用性、コンプライアンスを高い状態に維持します。



Red Hat について

エンタープライズ・オープンソース・ソフトウェア・ソリューションのプロバイダーとして世界をリードする Red Hat は、コミュニティとの協業により高い信頼性と性能を備える Linux、ハイブリッドクラウド、コンテナ、および Kubernetes テクノロジーを提供しています。Red Hat は、クラウドネイティブ・アプリケーションの開発、既存および新規 IT アプリケーションの統合、複雑な環境の自動化および運用管理を支援します。受賞歴のあるサポート、トレーニング、コンサルティングサービスを提供する Red Hat は、**フォーチュン 500 企業に信頼されるアドバイザー**であり、オープンな技術革新によるメリットをあらゆる業界に提供します。Red Hat は企業、パートナー、およびコミュニティのグローバルネットワークの中核として、企業の成長と変革を支え、デジタル化が進む将来に備える支援を提供しています。

アジア太平洋

+65 6490 4200
apac@redhat.com

オーストラリア

1800 733 428

インド

+91 22 3987 8888

インドネシア

001 803 440 224

日本

03 4590 7472

韓国

080 708 0880

マレーシア

1800 812 678

ニュージーランド

0800 450 503

シンガポール

800 448 1430

中国

800 810 2100

香港

800 901 222

台湾

0800 666 052

fb.com/RedHatJapan
twitter.com/RedHatJapan
linkedin.com/company/red-hat

jp.redhat.com
#639715_1223

Copyright © 2024 Red Hat, Inc. Red Hat, Red Hat ロゴ、および Ansible は、米国およびその他の国における Red Hat, Inc. またはその子会社の商標または登録商標です。Linux® は、米国およびその他の国における Linus Torvalds 氏の登録商標です。OpenStack® ワードマークと Square O Design は個別に、または一体として米国とその他の国における OpenStack Foundation の商標または登録商標であり、OpenStack Foundation の許諾の下で使用されています。Red Hat は、OpenStack Foundation と OpenStack コミュニティのいずれにも所属しておらず、公認や出資も受けていません。その他のすべての商標は、それぞれの所有者に帰属します。